



Title	ジュディス・バトラーによるアイデンティティを越えて連帯する重要性について
Author(s)	成田, 玲央奈
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 19-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジュディス・バトラーによる

アイデンティティを越えて連帯する重要性について

哲学哲学史 博士前期課程2年

成田 玲央奈

はじめに

ジュディス・バトラーは、『アセンブリ』(2015)において、政治制度や社会規範によって差別され、不利益を被っている人々が、街頭や広場に集まり、デモや集会を行うことが、現状に異議申し立てし、そうした現状を変化させるために有効であると考えている。こうした政治的・経済的に不安定な立場に追いやられているのは、女性や、セクシュアル・マイノリティ、また貧者や人種的マイノリティの人々などであり、バトラーは、こうした人々が、現行の不平等な状況に対抗するために、広く連帯することができると考えている。この点からバトラーは、アイデンティティを基盤として連帯し、主張を行うアイデンティティ・ポリティクスを批判し、種々の運動を結びつける方法を模索する。そうしたなかで導入される概念のうちのひとつが、「文化翻訳」である。

したがって本稿では、まずバトラーに沿いながら、アイデンティティ・ポリティクスの問題点を考察したのち(第1節)、「文化翻訳」に着目しながら、人々がアイデンティティを越えて連帯する重要性について述べる(第2節)。

1. アイデンティティ・ポリティクスの問題点

アイデンティティ・ポリティクスとは、自身がもつと考えるアイデンティティ、あるいは自身が所属する特定の社会集団を基盤にし、それらを根拠として政治的な主張や運動を行うことを指す。またその際、あるアイデンティティには共通する性質や経験が存在することを前提し、基本的には集団内で統一された主張をもつ。

しかしこうした考えは、アイデンティティを基盤に置くことによって、アイデンティティを不変のものであるとして固定してしまう。またアイデンティティ集団の内部と外部の境界線を明確に引くことで、さまざまな他者との連帯の可能性をもつことができない。アイデンティティを基盤とした連帯は、同一のアイデンティティをもつと考える人々をその集団の内側へと承認すると同時に、他のアイデンティティをもつと考える人々をつねに外側へと排除する。したがって、マジョリティとマイノリティの分断だけではなく、マイノリティとマイノリティの分断さえもうんでしまうことになる。こうした問題点を解消しながら、政治的な主張を行っていくために、バトラーが目指すのは、

「マイノリティ・コミュニティや政治組織の間に一連の目標が重なり合っているという認識に基づく、強力な連帯を作り上げること」(Butler, 2000, 226)である。

2. アイデンティティを越えた連帯

前節では、アイデンティティを基盤とするアイデンティティ・ポリティクスの問題点として、アイデンティティを固定化してしまうこと、また、アイデンティティ集団の内部と外部の境界線を明確に引くことで、種々の運動を分断してしまうことを取り上げた。このような点からバトラーは、「統一」を前提としない開かれた連帯の重要性を考察している。こうした連帯の可能性を示す際に、バトラーは、文化翻訳という実践を導入するが、それは、バトラーの普遍の分析の中に見られる。したがって本節ではまず、バトラーの普遍理論について簡単に要約したのち、翻訳実践によりアイデンティティを越えた連帯を行っていく重要性について述べる。

2.1 普遍／個別という二項対立の批判

カントに代表されるような、形式主義的な普遍は、個別や具体から完全に独立した、内容をもたない純粋な形式であると考えられている。これに対してヘーゲルは、形式主義的な普遍は、個別を排除することによって成り立っているため、つねに排除する個別を必要とし、個別から独立することはできない、と批判した。バトラーは、ヘーゲルと同様の立場をとり、形式主義的な見解が主張するように普遍と個別を明確に分離することはできず、個別から独立した純粋な形式であるとみなされていた普遍は、実際には必然的に不純なものであると述べる。この点でバトラーは、普遍と個別という二項対立的な関係について疑問を呈し、またこうした普遍は、その構造上、排除の機能をもつことを指摘する。さらにバトラーは、形式主義的な普遍が、あらゆる文化や言語、社会を超越したものとして想定されている点を批判する¹。こうした普遍は、あらゆる事象の基盤とみなされる普遍、および、自身を形式や構造として初めから前提する普遍である。

しかしながらバトラーは、普遍概念そのものを退けるのではなく、文化を超越した普遍を予め想定せず、普遍を「文化翻訳」という実践によって練り上げられていく未定的な概念であると捉えることを重視している。ここで述べられている文化翻訳は、文化と文化の間に境界線を設定し、ある文化の普遍概念を別の文化の普遍概念に翻訳することではない。バトラーによれば、文化は境界によって限られているものではなく、むしろ文化間の交流および翻訳は、それらの間に同一性を構築していく。したがって、普遍を、このように文化翻訳という構築的な行為として再考することで、文化を超越するような普遍の想定や、言語的、認識的な共通性があらかじめ存在しているという前提を退けることが可能となるとバトラーは考えている。

¹ バトラーによるこうした批判は、一例として、『ジェンダー・トラブル』(1990)にみられるが、今回は紙幅の関係上、割愛する。

2.2 文化翻訳と社会運動

バトラーは、こうした普遍に対する理論を、社会運動を考察する際にも導入している。社会運動においては、それぞれの集団が個別の主張をもっており、そうした主張を普遍の地位へと押し上げようとしているとみなされる。つまり、社会運動において、個別的な運動が、普遍を代表することを目的として行われると考えられている。しかしバトラーは、こうした見解では、普遍と個別の二項対立的な関係が前提とされていることを指摘する。バトラーによれば、社会運動はそれぞれ普遍概念をもって行われているが、そうしたそれぞれの普遍概念は、自分とは異なる言説において分節化されたほかの普遍概念と類似性をもっているにすぎないと指摘する。こうした普遍概念の特徴に着目すると、個別的な主張が掲げている普遍概念を、一足飛びに現行の普遍に同一化することはできないといえる。こうした点からバトラーは、個別的なものを、普遍的なものの代表にするという運動のモデルではなく、それぞれの運動において掲げられた複数の普遍概念が競合することによる運動のモデルを考えている。したがってバトラーが重視するのは、「表面的には論理的に両立しないように見えるが、社会的、政治的に重なり合う一連の目標を共有している相競う複数の普遍概念の間に、翻訳実践を行っていくこと」(Ibid., 225)である。バトラーは、あらかじめ普遍を想定し、それに個別を同一化させるのではなく、それぞれの運動が掲げる普遍概念が競合し、その普遍概念の間で翻訳を行っていくことによって、普遍を練り上げていく必要があると考えている。それによって、詳細にみれば異なる主張をしている種々の運動を、結びつけることができる。しかし競合する普遍を翻訳していく際には、一方の普遍を他方の普遍へと取り込んだり、単に押し付けたりしてはいけない。翻訳のプロジェクトという文脈で分節化される必要がある個別的な運動は、それぞれが普遍的概念をもってことを起こしているが、しかし翻訳は、目下の状況を単に支配的な言説で再記述することであってはならないとバトラーは述べる。なぜなら、翻訳が相競合する普遍の間で効果的であるためには、「支配言説は、『見慣れぬ』語彙をそれ自身の辞書のなかに組み入れることによって、それ自身が変化しなければならないから」(Ibid., 227)である。バトラーは、普遍をこうした翻訳作業であると捉えることで、社会運動を次のようなものとしてみなしている。

性的権利を求める性的マイノリティの運動の普遍化効果は、普遍そのものについて再考を促すものでなければならず、普遍という言葉を、その競合する意味作用や、それらが描いている多様な生の形態のなかにバラバラに分けていき、そして次にはこういった競合する語を縫い合わせて、巨大な一つの運動にすることだ。だがその一つの運動も、その「統合性」が評価されるのは、それ自身の定義を流動化させる内的差異を——馴化することなく——いかに持ちこたえられるかということによってのみである。[...] 政治的に必要とされる翻訳は、競合し重なり合う複数の普遍概念を裁定して、一つの運動に作り上げるための、翻訳の政治とし

て理解されなければならないとわたしは信じている。(Ibid.)

ここで考えられているのは、種々の運動に共通する普遍的構造や性質の存在を前提することなく、それぞれの運動を結び付けることである。翻訳作業は複数の普遍に何らかの共通点を見出すが、しかしそれは予め前提されている基盤でも構造でもない。複数の普遍による巨大な一つの運動は、複数のものを一つに統合しているのではなく、その内的差異を保ったまま、文化翻訳によって繋ぎ合わせられた、流動的なものとなるといえる。したがってこうした運動は、内部に統一を求めるものではなく、さまざまなアイデンティティをもつと考える人々が、それぞれのアイデンティティを越えて主張を行うことができるような連帯であるといえる。こうした連帯が可能にするのは、自身の主張を行うために他者を排斥せず、また集団の内部で主張を統一せずに、社会的、政治的、経済的に不利益な状態に置かれている現状に対して、効果的に異議申し立てを行うことである。

おわりに

本稿では、バトラーが述べる、アイデンティティを越えた連帯の重要性について考察した。まずアイデンティティ・ポリティクスの問題点を指摘し、次にバトラーによる、普遍理論を取り上げ、普遍を文化翻訳という未定的な実践であるとみなす重要性を考察した。こうした普遍の考え方から、バトラーは、個別的な運動が、普遍を代表することを目的としているとみなす見解を否定し、それぞれの運動において掲げられた複数の普遍概念が競い合うようなモデルにおいて普遍が構築されと考えていた。この際、翻訳実践によって競合する複数の普遍概念の間に何らかの共通点をうみだす可能性が見出され、それによって種々の運動を、そうしたものに共通する基盤的、構造的性質を前提することなく繋いでいく可能性が見出される。このように、種々の運動を繋ぐことは、現状異議申し立てを行うことが難しい状況にあるマイノリティを繋ぎ、より効果的なやり方で、差別や不平等に抵抗していくための、手段であるといえるだろう。

参考文献

- Butler, J. (1990), *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity*, New York: Routledge. (1999, 竹村和子訳, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』, 青土社)
- Butler, J. (2015), *Notes Toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press. (2018, 佐藤嘉幸・清水知子訳 『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』, 青土社)
- Butler, J., E. Laclau and S. Žižek, (2000), *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, London: Verso. (2002, 竹村和子・村山敏勝訳 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性——新しい対抗政治への対話』, 青土社)